

銅矛をまつる北部九州の東征と

3世紀中頃のホケノ山古墳の出現

柴山 鳥人

銅矛をまつる北部九州の国家が東征し、3世紀中頃、奈良盆地東南部に初期ヤマト政権が成立した。

東征前の2世紀後半の前初期ヤマト政権から東征後の3世紀中頃の初期ヤマト政権では政治・軍事を担う大王よりも宗教的権威のある斎宮日巫女が国王と認識されていた。

ヤマト政権東遷説は、北部九州と西部四国の広形銅矛をまつる地域を支配する国が東征し近畿と東部四国の近畿式銅鐸をまつる地域を支配する国を併呑し、奈良盆地の東南部を拠点として初期ヤマト政権が始まるとの仮説である。

初期ヤマト政権は東征後、初期前方後円墳を築造し始め、勢力を拡大していく。初期前方後円墳のホケノ山古墳の築造は3世紀中頃とされていることから、3世紀中頃までには東征があったことになる。

北部九州の奴国の中枢である比恵・那珂遺跡群が3世紀後半に衰退するのは、東征後の遷都の影響と考えられる。しかし、初期ヤマト政権が東遷後に半島との通路となる北部九州の支配を放棄するはずはなく、北部九州・西部四国・東部四国・近畿を支配していたのではないだろうか。

東征前の弥生後期、北部九州と西部四国の広形銅矛をまつる地域と近畿と東部四国の近畿式銅鐸をまつる地域の2つの勢力圏が重なり合う場所が、土佐国安芸郡である。九州北部を中心とする前初期ヤマト政権は、東征にあたりまずこの地の支配を確実なものにしたいと考えるはずである。

神武東征について、古事記では阿岐國之多祁理宮（たけりのみや）、日本書紀では安藝國埃宮（えのみや）に滞在したとの記載がある。ウィキペディアには「高知県安芸郡奈半利町の多気神社という説もある。」とある。東征で滞在したのは土佐国安芸郡多気神社ではないだろうか。

古事記では次に吉備之高嶋宮に、日本書紀では次に吉備國高嶋宮に滞在したとの記載がある。吉備国は東征後の初期ヤマト政権の支配領域の外である。吉備国高嶋は、東征後に支配領域内となる紀伊国高嶋の誤りであり、和歌山県白浜町の高嶋（円月島（えんげつとう）の通称がある）ではないだろうか。

そうだとすると、東征後には、旧王都筑前国那珂郡比恵・那珂遺跡から日に向かって豊前国宇佐郡、豊後水道を南下してから土佐国安芸郡、紀伊水道を渡り紀伊国の高島（円月島）までを水行し、そこから陸行し紀ノ川を遡り新都纏向遺跡までの路が整備されたのではないだろうか。

神武東征について、日本書紀には甲寅年（紀元前667年）に出て己未年（紀元前662年）に都をつくらせるとある。仮に干支が正しいとして3世紀中頃に当てはめると、甲寅年（西暦234年）に東征を始め、己未年（西暦239年）に都を作り始めたことになる。そうすると、魏国の使者は、西暦240年には遷都前の旧都に、西暦250年頃には新都に来ていて、2度の来日の記録が混同されてしまったのだろう。「南至邪馬壹國女王之所都水行十日陸行一月」は新都纏向への行程であり「至る」は「ある状態に達する」との意味で倭人のいる土地の南に沿って水行すると邪馬台国に達するとの意味であろう。

さて、ヤマト政権東遷説をとる場合、魏志倭人伝の邪馬台国は東征前の2世紀後半の前初期ヤマト政権から東征後の3世紀中頃の初期ヤマト政権ということになり、前初期から初期ヤマト政権は女王国だったことになる。

邪馬台国がヤマト政権ならば、女王卑弥呼は齋宮日巫女の蓋然性が高い。政治・軍事を担う大王よりも宗教的権威のある齋宮日巫女が国王と認識されていたことになる。

ヤマト政権が女王国であった名残だと思われる記載が日本書紀の中にある。

用明天皇により齋宮として伊勢神宮に遣わされた須加手姫皇女について日本書紀の分注に「この皇女は、この天皇の御時から、推古天皇の御代まで、皇大神宮にお仕えし、後年、母の里、葛城に退いて亡くなられた、と推古天皇紀に見える。ある本に、この皇女は三十七年間も大神にお仕えした後、自ら退いて亡くなられたとある。」とある。ウィキペディアには「普通は父帝の崩御とともに服喪の意味を込めて退下するので、本居宣長は「古（いにしへ）に服（服喪のこと）と云事無かりしを知べし」と説いている（『記伝』）。」とあるが、これは齋宮が大王よりも高位にあった名残ではないだろうか。

「推古天皇34年（西暦626年）春一月桃や李の花が咲いた。」のは「酢香手齋宮34年（西暦618年）唐を李が建国した。」こと言葉遊び若しくは暗号・倒語（さかしまごと）ではないだろうか。

また、天武天皇の皇女で伊勢神宮に遣わされた託基皇女（たきのひめみこ）は、律令制において定められていた親王・内親王の位階で最も高い品位である一品に叙せられている。ウィキペディアには「奈良時代を通じて内親王で一品に昇進したのは、彼女と氷高皇女（後の元正天皇）の2人だけである。」とある。これも齋宮に特別な敬意が払われていた名残ではないだろうか。

【参考とした書籍等】

口語訳古事記神代篇	(訳・注釈：三浦佑之	文春文庫)
口語訳古事記人世篇	(訳・注釈：三浦佑之	文春文庫)
日本書紀（上）全現代語訳	(訳：宇治谷孟	講談社学術文庫)
日本書紀（下）全現代語訳	(訳：宇治谷孟	講談社学術文庫)
先代旧事本紀〔現代語訳〕	(監修：安本美典、訳：志村裕子	批評社)
日本の歴史：1	(編者（代表）：家永三郎	ほるぷ出版)
弥生時代の歴史	(著者：藤尾慎一郎	講談社現代新書)
ウィキペディア		

【著者の出版物】

アマテラス **ひ**と **い**ツキヨミ **こ**とスサノオウ

国生み神話の復元を起点に古事記と日本書紀から復元した大倭国の始まり

著者 柴山 鳥人

アマゾン電子書籍 kindle 版 397 円 (kindleunlimited 対象)

オンデマンド (ペーパーバック) 1,234 円